

『ライオン 25 年目のただいま』 原題 A Long Way Home 2016



©2016. Long Way Home Holdings Pty Ltd and Screen Australia

映画批評

『ライオン 25 年目のただいま』
～ 養母、実母と息子をつなぐ 1 本の糸 ～
塚田三千代（翻訳家・映画アナリスト）

これは 2012 年に出版された実話に基づいて製作された映画である。原作はカルカッタ駅で迷子になったサルーの 25 年間の物語であるが、その間の言葉では語りつくせないものを映像で伝えた秀逸した映画作品である。養母の養子に向ける言葉では表わしきれない人間の内面的情感を、養母役のニコール・キッドマンが顔の表情と身体表現で滲みだしている。成長したサルーには生地インドにいる実母や兄への想いと育ての養母への想いが交差する、彼の心情は言葉でなくともよく伝わってくる。

【STORY】

事実は小説より奇なりというが、サルーの 25 年間の物語もじつに驚きと感涙させられる事実であった。

兄と母親が見つからずに孤児収容所に入れられた5歳のサルーが、オーストラリアに住む裕福な夫妻の養子になって、成長してゆき、メルボルンの大学でホテル・マネージメントを勉強していたある日、友人に誘われてインド料理のパーティへ出かける。

その家のキッチンで目に留まったのが「揚げ菓子」であった。それは幼いサルーが屋台に並ぶ「揚げ菓子」を指さして、食べたいと言うと、お金ができたら沢山買ってやるからな、と言った兄。とつぜんサルーの脳裏にこれまで思ったこともなかった映像が浮かびあがってきた。

サルーは5歳のときに、兄と共に貧しい家計を支えるために夜間労働に出かけたものの、眠気に勝てず列車の中で眠り込んでしまい、目が覚めた時はドアの開かない回送列車の中であった。やっと4日後に外へ出られた所はカルカッタ駅のプラットホーム。往来する人々で大混雑の中を、兄を探しても見つかるはずはなく遂にサルーは大都会の迷子になってしまった。

ストリート・チャイルドとしての生活が始まり、そして孤児収容所へと送られる。

友人たちに問われるままに、サルーはじつは自分はオージーではなく、インド人で迷子になり、今の夫妻の養子になったのだと初めて話す。PCで「グーグル・アース」を検索すれば生まれた場所を探せるよ、と友人は教えてくれたが、まったく気乗りがしなかった。

しかし、サルーはその日以後は駆り立てられるように、「グーグル・アース」での検索にのめり込んでいく。時刻表から距離と時間を算出して列車の経路を逆算し、うろ覚えの記憶の中にある給水棟が近くにある駅を探し出す作業である。じつに気の遠くなる作業である。



養父母に育てられて25歳に成長したサルー



迷子になった5歳のSaler



迷子になる前の5歳のSalerと最愛の兄



養父母にしがみつく幼いSaler



成長してゆくSalerに、優しく接する養母



成長したSalerと恋人の



養母を演じるニコール・キッドマン



サルーが生家を見つけ出して、やっと再会できた実母

(2017/1/18 by m.tsukada)

【映画史リテラシー】

- ▼2012年に発表されて世界のニュースとなった実話。
- ▼1986年代のムンベイ、カルカッタ駅と街中、スラム街、ストレート・チルドレン、迷子収容所の養子斡旋、オーストラリアの島
- ▼映画の中の言語:英語、一部にヒンズー語・ベンガル語
- ▼Google Earthで起こした奇跡
- ▼監督ガース・ディヴィスは、本作が初の長編映画
- ▼ゴールデン・グローブ賞の作品賞他4部門(作品賞・助演男優賞・助演女優賞・作曲賞ノミネート

【映画情報】

4月7日(金)～全国公開

主演:デヴ・デイヴィス/ ルーニー・マーラ/ デヴィッド・ウェンハム/ ニコール・キッドマン

監督: ガース・ディヴィス 製作: イアン・カニング

脚色:

原作:『25年目の「ただいま」 5歳で迷子になった僕と家族の物語』 サリー・ブライアリ一著

オーストラリア/ 119分/ カラー デジタル/ 英語、一部にヒンズー語・ベンガル語

日本語字幕: 戸田奈津子

配給:GAGA

区切線

© 2017.1. m.tsukada. All Rights Reserved.